

## 第6回 大政奉還はゴールではない。スタート地点だった。

文：京都国立博物館学芸部上席研究員 宮川禎一

大政奉還が成し遂げられる可能性を慶応 3 年 10 月上旬に生きていた当時の人々はどれくらい考えていたのだろうか？徳川慶喜が建白を却下する可能性も考えられよう。慶喜側は予想に反する行動をとることが薩長に対抗する手段だと考えていたのだろうか。

しかし現実には大政奉還がおこなわれてしまえば薩長側に武力倒幕を行う名目がなくなり、政権をいきなり返上された朝廷も困り果てて、再び政権を徳川に委任しないとも限らない。

この場面では大政奉還建白書に書いてあるとおりの新国家をできるだけ早く樹立する必要があった。土佐藩を中心とする大政奉還派の面々は、議政所（上下二院制議会）の詳細をよく分っていないままに建白書に掲げたので、海援隊士の長岡謙吉らを江戸へ派遣して英国外交団の通訳アーネスト・サトウにイギリスでの具体的な議会運営方法を聞こうとした。これはまさに泥縄式だ。

一方、坂本龍馬が心配していたのは新政府の財政である。徳川の時代、朝廷は幕府からのお小遣いで生きていたようなものだ。領地や財源は無いに等しい。そこで龍馬は 10 月末から 11 月初めに福井へ行って旧知の越前藩士三岡八郎（のちの由利公正）を旅館に呼びだし、丸一日新政府の財政問題を主題に話し合ったのだ。帰京した龍馬はすぐさま新政府首脳に三岡八郎を福井から上京させ新政府の財政担当者とするようにしつこく促している。近年発見された「越行の記」は龍馬が福井で三岡と何をしゃべったのかを後藤象二郎に報告する手紙の草稿である。このなかで「金銀物産をまかせられるのはこの三八（三岡八郎の略称）をおいて他にない」と力説している。三岡は 12 月中旬になってようやく京都の朝廷に出仕した。翌慶応 4 年（明治元年）には太政官札という福井産の楮紙（こうそがみ）でできた紙幣を 4800 万両分も発行し、戊辰戦争の戦費や殖産興業にあてたのだ。現在の財務省の起源の話である。龍馬は大政奉還建白書が示した新国家建設のため三岡八郎をスカウトに福井まで行ったのである。京都近江屋で亡くなる直前のことであった。